童話の選択とその心理的基礎

幼児の教育には、童話はかなり重要な意味をもつ。幼児のもの世界は、想像が成る世界であつて、目をかめるもの、触れるもの、幼児がきく童話に於ても、想像をつくりあげる。幼児がきく童話は、あるのである。最も幼児等の生活に則したものを築るべき人格の上に、美しい果実を結ぶために甚だ大切なことである。さてかくの如く童話が幼児の感情生活に重大な関係があるとすれば、われわれは、その話し聞かせる童話についても、教育的見地を忘れてはならない。一方に於て幼児の心理的実態に基づいて、いかにすれば幼児の成長の途次にあたって、その本末の感情を酵化することができぬかを考へなくてはならない。こ
言葉が見破られてどうしようか殺されたと云ふようなのは
はならない。すなはち、「ごらんなさい子供達が大よ
るこぶです」とか、「プランコは子供のよろこぶも
のです」と云ふやうな取扱が即ちこれである。よろ
しくこれは「ごらんなさい太郎さんも次郎さんも大
しようこぶです」と云ひ、「プランコはほんとうに何
て面白いでせうて」と云ふべきである。「そんなデ
リケートなことは何のことに値しないと思ふ方が
あるかも知れないが、これはやがて童話そのもの
全體の取扱にかう云ふ間違えた、幼児の心理からは
なるべきことの一つあることを失はぬ。
もって、幼児が描く童話の世界に、悲劇はない、
どこまでも楽天的であり、善因善果であり、計画は
までを破れて悲劇に終る必要、計画したことが途
果に悲しむべき破綻の来ること、などは幼児が世界に於
て必む矛盾を来すものである。悲劇的結末に対する
興味や想像の働くのはすっごく弱年のことである。幼
へば、この世の中に行られてある社会の実相につ
いて語って、善人必ずしも権えずと云ふようなこと
や、よくある、虚言を愛しましてゆく話にその虚